

Kanno Kazuhiko / OpenAI o1 2025.3.20

福音書に書かれているオリーブ山の説教（24:-25:）は、偽善者で満ちた強盗の巣となった都が有罪判決を宣告され（マタイ21:23-23:39）、その刑罰が執行される日がいつかを教えるものです。過去主義の立場だとAD70年に執行されたと考えるので、執行猶予は40年だったことになります。

OpenAI o1

一般的な「過去主義（プレテリスト）」の理解では、イエスがエルサレム滅亡を予告し、それが紀元70年の神殿崩壊（ローマによるエルサレム陥落）で成就したと捉えます。そして、イエスによる宣告（マタイ21-23章）から実際の滅亡に至るまでが約40年という点に、旧約聖書のイスラエルの「40年」という期間（荒野の放浪、王の治世年数など）との関連を見出す解釈もあります。以下、その概略をまとめます。

1. 「オリーブ山の説教」の内容

- 対象となる預言

マタイ24-25章（並行箇所：マルコ13章、ルカ21章）で語られる「オリーブ山の説教」は、神殿破壊の予告と終末に関する言及が混在しているため、解釈上の議論が多い箇所です。プレテリストは特にマタイ24章前半（またはほとんど全体）を紀元70年のエルサレム崩壊の預言と位置づけます。

- 偽善者・強盗の巣の指摘

イエスは神殿を含むエルサレム宗教指導者の偽善性を厳しく非難し（マタイ21:12-17, 23:1-36等）、その裁きが下ることを繰り返し述べています。

- 「強盗の巣」とは、イエスが神殿で両替人や商人を追い出した際（マタイ21:12-13）に引用した言葉（エレミヤ7:11）が背景。
- 「あなたがたの家は荒れ果てたまま残される」（マタイ23:38）など、神殿の崩壊を示唆する言葉が続きます。

2. プレテリスト（過去主義）解釈とは

- 主張の要点

「イエスの預言した裁き（都市・神殿の崩壊）は、すでに紀元70年に実現した」という立場。

- それ以後の歴史は、ここで言われた「契約の民への裁きの成就」を経て進んできた、という理解。
- 新約聖書のヨハネの黙示録も、エルサレム崩壊までか、その直後までに完成している（早期日付説）と絡めて説明されることが多い。

- 40年の執行猶予

イエスの公生涯が始まったのがおおよそ紀元30年前後とされ、エルサレム滅亡が紀元70年。ほぼ40年という区切りは、聖書の中でしばしば出てくる「試練」や「猶予」の象徴的な数字と関連づけられることがあります。

- 旧約における40年の荒野放浪（出エジプト16-17章など）。
- ダビデやソロモン等の王の治世年数「40年」。
- ノアの大洪水前の「40日40夜の雨」という審判の期間との関連。

3. なぜ40年が強調されるのか

1. 象徴的数字としての「40」

聖書中に幾度も登場する「40」は、試練・裁き・悔い改めに関わる事柄によく用いられるため、「この40年こそ神が猶予を与え、悔い改めの機会を与え続けた期間」と解釈されます。

2. 福音宣教とユダヤ人への猶予

キリストの十字架と復活後、教会（初代エルサレム教会）の活動が始まり、まずはユダヤ人への福音宣教がなされました（使徒の働き1-7章など）。

- その猶予期間の頂点として紀元70年の裁きが下り、神殿中心の宗教体制は崩壊した、という捉え方です。

3. 歴史的証拠としてのエルサレム滅亡

紀元70年のローマ軍によるエルサレム占領・神殿破壊は、ユダヤの歴史だけでなく、ローマ帝国側の歴史（タキトゥス、ヨセフス等）でも記録されています。イエスの預言を「史實的に成就したもの」として重要視するのがプレテリスト的読み方の大きな特徴です。

4. まとめ

● イエスの宣告と紀元70年の神殿崩壊

イエスがマタイ21-23章で語るエルサレムの偽善者への非難と裁きの宣告は、プレテリスト的には「紀元70年のエルサレム滅亡を指し示す預言」とみなされます。

● 約40年の「執行猶予」

イエスの宣教活動がなされてから、実際に裁きが実行されるまで約40年。「40年」という期間に、旧約時代からの悔い改めの呼びかけ・試練といった聖書的モチーフが見られる、という解釈がなされます。

このように、「オリーブ山の説教」でイエスが語った預言が40年後のAD70年に成就したとするのがプレテリストの見解であり、それにより「裁きの執行猶予」が40年あったと理解されるわけです。

約束の地に入る前の荒野の40年ですね。新天新地に入る前の40年で、新しい神の民である教会が、キリストの花嫁として整えられました。

OpenAI o1

一般にフル・プレテリスト（完全過去主義）の立場では、イエスの十字架と復活によってはじめた新しい契約の時代（新約時代）は、古い契約秩序（旧約時代）と重なり合う形でしばらく続いていた、とみなします。そして最終的に紀元70年の神殿崩壊によって古い秩序が完全に終わり、新天新地（新約秩序）が本格的に到来した、という理解をとります。そこには「約束の地に入る前の荒野の40年」との対応関係があるわけです。

1. 荒野の40年と教会の整え

- **旧約時代のアナロジー（出エジプトから約束の地へ）**

イスラエルの民は、エジプトを出てから約束の地に入るまでの間、荒野で40年の訓練と試練を受け、神の律法に従う民として整えられました。

- **新約時代へのアナロジー（旧約が終わり、新天新地へ）**

イエスの十字架と復活（おおよそ紀元30年前後）からエルサレム神殿崩壊（紀元70年）までの約40年間を、古い契約（モーセの律法と神殿儀式）が残存する“過渡期”とみなし、その間に「教会」（イエスをメシアと信じる共同体）がキリストの花嫁として整えられた、と理解します。

2. 「旧い契約の終わり」と「新しい神の民」の完成

- **二つの契約の重複期間**

この40年間は、祭司制度を中心とする旧約の礼拝形態が神殿とともにまだ機能していた一方、聖霊が与えられ（使徒2章）、新しい契約共同体である教会が誕生して爆発的に拡大していった時期にあたります。

- つまり「旧い契約の民」と「新しい契約の民」が暫定的に並存していたと見るわけです。

- **神殿崩壊を境に切り替わる**

紀元70年に神殿が完全に破壊されたことにより、旧い契約を象徴してきた「動物の犠牲」「祭司による奉仕」「年ごとの贖い」などが物理的に行えなくなりました。これをもって、旧い体制が最終的に終焉したと位置づけます。

- それ以降、イエスが「まことの大祭司」としてすべてを完了した（ヘブル書全体）という新約の理解が明確化し、新しい民である教会が「神の幕屋」（黙示録21:3）として歩む時代が始まったとされます。

3. 「新天新地」と花嫁としての教会

- **黙示録における婚宴のイメージ**

黙示録19-21章では「小羊の婚宴」や「聖なる都、新しいエルサレム」が登場し、新天新地が語られます。フル・プレテリストの解釈では、これらのイメージが「教会こそがキリストの花嫁として迎えられ、神の住まいが人々とともにある状態（黙示録21:3）」を指す、と見ます。

- **花嫁が整えられる期間**

出エジプト後にイスラエルの民がシナイ契約を結び、荒野で神に従う「婚約関係」が整えられたように、新約時代でもイエス・キリストによって贖われた信徒共同体が「花嫁」として純潔を学び、福音宣教や試練を通して成長し、最終的に旧約の終焉（紀元70年）を経て“完全なる花嫁”として迎えられたという理解です。

4. まとめ

- **40年の「荒野の旅」→「約束の地」**

旧約における荒野の40年を、新約における過渡期（紀元30年頃-70年）に当てはめ、イエスの花嫁となる教会が整えられる期間と捉える解釈があります。

- **古い契約体制の終焉と新天新地**

古い契約の象徴であった神殿が破壊されたことで、旧約体制が完全に幕を下ろし、「新天新地」が現実化したと見るのがフル・プレテリスト的な神学的視点です。

- **教会が完成に至る**

この観点では、教会はイエス・キリストの御業によって創始されつつも、神殿崩壊という歴史的な区切りを経て、キリストの花嫁としての姿が公に確立された、と理解されます。

このように「約束の地に入る前の荒野の40年が、新天新地に入る前の40年に対応し、その間に教会が花嫁として整えられた」という図式は、フル・プレテリストの解釈の中心的なメタファーです。旧約と新約の歴史の平行を強調しつつ、紀元70年を神学的転換点と見做す流れの中で大切にされている見方といえます。

現代は、千年王国の時代の中にいて、黙示録20:7-15は、歴史の終わりの時のこと。21章からはその後のことではなく、時間が戻ってAD70年の幻だと見ています。「結婚」はハッピーエンドですが、新しい始まりのことです。創造の7日目は完成であると同時に始まりでした。

OpenAI o1

ここで述べられているのは、フル・プレテリズム（完全過去主義）的な理解の中でも、黙示録の描写を「いったん歴史の終末（黙示録20:7-15）まで進んだ後に、時系列が巻き戻り（21章から再度 AD70年にフォーカス）、新しいエルサレム＝新しい契約体制の到来を語っている」という解釈です。しかも、その新しいエルサレム到来（「婚宴」）は「ハッピーエンド」であると同時に、そこから「新しい始まり」が展開していくという視点になります。

以下、このような理解の背景や神学的モチーフを簡単に整理してみます。

1. 黙示録の構造の「再帰的（回想的）描写」

- **連続した時間の流れで読まれにくい書物**

黙示録は、しばしば「いくつかのヴィジョンが繰り返され、しかも視点が切り替わりつつ再帰的（回想的）に同じ事柄を別の角度から描く構造をもつ書物」と説明されます。

- たとえばラッパや封印、鉢の裁きなどが部分的に重複しているように見える、あるいは幾度も“最後”のように描写される、といった点が典型的です。

- **フル・プレテリストにおける黙示録20-21章の時間処理**

一部のフル・プレテリストでは、黙示録20:7-15を歴史の最終的な終末（本当の意味での「終わり」）と捉え、21章以降は再度視点が「AD70年時点に戻る」と解釈します。

- つまり「千年王国」は現在も続き、黙示録20章末尾はまだ遠い未来（世界の最終的審判）を示す。一方、21章はAD70年の神殿崩壊を経た「新しい契約の時代」のビジョンに戻って説明している、という形です。

2. 「結婚」というゴールであり新たなスタート

- ゴールとしての婚宴・完成

黙示録19-21章に登場する「小羊の婚宴」や「花嫁」は、物語的には一つの頂点・クライマックスを描きます。結婚は物語としてはハッピーエンドの象徴ですが、同時に新生活の始まりでもあります。

- 新しい契約時代のはじまり

フル・プレテリスト的視点では、紀元70年の神殿崩壊によって旧約的（モーセ律法・祭儀制度を中核とする）秩序が完全に終わりを告げ、教会こそが真の「神の幕屋」「神の臨在の場」とされる新しい時代が本格的に始まった、と理解されます。

- これは「婚宴」が整えられた後に新生活が始まるイメージに重ねられ、**完成かつ始まり**という二重の意味をもつわけです。

3. 第7日（安息日）の完成と始まり

- 創造の7日目にみる二重性

創世記2:2-3にある「神は第7日にその業を終え、休まれた」という叙述は「完成」と同時に「神の安息のはじまり」とも解釈されてきました。

- つまり「仕事の完了」と「安息という祝福の新しい状態の始まり」が同時に訪れるという構図です。
- ユダヤ的伝統でも、「安息日」は労働が終わる日であると同時に、神の祝福の象徴としての特別な日という始まりの要素をもちます。

- 黙示録・新天新地への転用

黙示録の「新しい天と新しい地」（21:1）も一種の“完成”を意味しますが、これは次なる現実のスタート、すなわち**新しい創造の秩序が開かれる**ことでもあると捉えられるわけです。

4. 「千年王国の今」と「歴史の終わり」の区別

- 現在は千年王国の時代？

フル・プレテリストの多くは、キリストの十字架・復活・昇天、聖霊降臨、そしてAD70年の裁きを経て「キリストの王国（千年王国）が始まった/すでに成就した」と見ます。

- その延長線上に現在の教会時代があり、黙示録20:7-15の「サタンの最終的解放と最終審判」は、まだ遠い将来の出来事と位置づけます。

- 21章以降はAD70年を再び詳細に示す

「新天新地」や「新しいエルサレム」のビジョンは、旧約の終焉（神殿崩壊）直後に現実化してきた「新しい契約の民である教会」のイメージを描き出すものだ、と理解されるわけです。

5. まとめ

1. 黙示録の構造と時間の扱い

黙示録は直線的に未来をスライドショー的に見せるのではなく、ヴィジョンが繰り返し（時に巻き戻し）説明される書物。そのため、20章末で「本当の最終審判」を描いたあと、21章以降はAD70年時点に時を戻して「新しいエルサレム」「小羊の花嫁」「新しい始まり」を再度描写している、とする。

2. 結婚は完成であり新しいスタート

聖書の「婚宴」は、ストーリーの頂点＝ハッピーエンドであると同時に、新しい生活が始まるモチーフでもある。旧約体制の終焉が、新しい契約下での教会の時代の本格的開始を象徴する。

3. 創造の第7日と安息日

神が創造を完了した日は、安息のスタートでもあった。同様に、黙示録で示される「完成された新天新地」は“終わり”であると同時に、神の新しい秩序が「始まる」出来事として捉えられる。

このように、黙示録20:7-15を最終的な歴史の終局（遠い未来）、21章を「AD70年の新しい始まり」へ時間を戻したヴィジョンとして読むことで、「結婚の完成」と「新しい時代のはじまり」を二重に強調しているのが、フル・プレテリズムの一部の立場の特徴です。「完成は同時に始まりである」という神学的テーマは、聖書全体に通底するモチーフとも言えます。

黙示録全体は、勝利の詩歌、新しい歌で香り付けされています。黙示録の賛美の声や歌をリストにしてください。

OpenAI o1

以下、ヨハネの黙示録における「賛美の声」「歌」「新しい歌」など、神やキリストを讃える言葉が記されている主な箇所を章節順にまとめました。引用箇所は状況や文脈によって少し区切りが異なることもありますが、代表的に挙げられる賛美の歌や詩句は以下の通りです。

1. 黙示録 1:5-6

- 「わたしたちを愛し、その血によって...王国とし、祭司としてくださった方に...栄光と力が永遠にあるように。」
- 書簡の冒頭で、イエス・キリストへの賛美（小さなドクソロジー）が示されます。

2. 黙示録 4:8

- 四つの生き物が昼も夜も絶えず「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主なる神...」と唱える。
- イザヤ6:3を想起させる三重の「聖なるかな」の讃美。

3. 黙示録 4:11

- 二十四人の長老がひれ伏して唱える賛美：「主よ、み旨によって万物は存在し、また創造されたのです。」

4. 黙示録 5:9-10

- 「新しい歌」と明記される代表的箇所：「あなたこそ巻物を受け...開くのにふさわしい方です。あなたはほふられて...あらゆる国民の中から人々を贖い...神の国となさったからです。」

5. 黙示録 5:12-13

- 天の群衆が「ほふられた小羊は...力と富と知恵...栄光と賛美を受けるにふさわしい」と声を合わせる。
- 続いてあらゆる造られたもの（被造物）が「御座にいます方と小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が...」と唱える。

6. 黙示録 7:10, 7:12

- 大群衆が「救いは御座にいます私たちの神と、小羊にある」と叫び、

- 御使いたちが続けて「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが...私たちの神に永遠にあるように」と讃える。

7. 黙示録 11:15, 11:17-18

- 第七のラッパの響きと共に、「世界の王国は私たちの主とそのキリストのものとなった。...永遠に支配される」と高らかに宣言される。
- 二十四人の長老が「全能者にして今おられ、かつておられた主よ、あなたに感謝します...」と賛美を捧げる。

8. 黙示録 12:10-12

- 「今や...神の国とそのキリストの権威とが現れた」と大声で叫ばれ、天での勝利宣言が歌われる。

9. 黙示録 14:2-3

- 「大水の音のような声...たくさんの雷のような声...それは琴を弾く人たちが琴を奏でているようでもあった。彼らは御座の前で新しい歌を歌った。」
- 14万4千人が「新しい歌」を歌う場面。

10. 黙示録 15:3-4

- 「彼らは神のしもべモーセの歌と、小羊の歌を歌っていた。『主よ、全能なる神よ、あなたのみわざは偉大で驚くべきもの...』」
- 出エジプト記15章（モーセの歌）との対比をもつ有名な「歌」。

11. 黙示録 16:5-7

- いわゆる「大きな声」で神の正しいさばきを称える賛美の応答。「義なるかな...聖なるかな...神は正しい裁きを行われた...」という内容。

12. 黙示録 19:1-8

- 「大群衆の声」のハレルヤの賛美が続く。
- 「ハレルヤ。救いと栄光と力は...神のもの...」、「ハレルヤ、主なる私たちの神...王である方が支配しておられる」
- 子羊の婚宴が近づいた喜びの歓声が響き渡る。

補足

- 黙示録では「新しい歌（new song）」と明記される箇所が主に2か所（5:9, 14:3）登場し、さらに「モーセの歌と小羊の歌」（15:3）が歌われる場面など、**神と小羊（キリスト）への絶え間ない賛美**が全体に散りばめられています。
- これらの讃美や詩句は、黙示録が単に恐るべき裁きだけを描く書物ではなく、「**神の勝利**」「**キリストの栄光**」「**教会の最終的な祝福**」を強調する「勝利の詩歌」で満たされていることを象徴的に示しています。

このように黙示録は、序盤から終盤に至るまで至る所で「香り立つような賛美の声」にあふれている、と言えるでしょう。

「大バビロンは倒れた」も勝利のことばですね

OpenAI o1

黙示録の中で繰り返される「大バビロンは倒れた（Fallen, fallen is Babylon the Great）」という宣言（たとえば黙示録14:8、18:2 など）は、まさに神の勝利を象徴することばの一つです。

- **旧約のバビロン**はイスラエルの民を捕囚にした大国として、神の民を圧迫する象徴的存在でした。
- **黙示録の大バビロン**も、偶像崇拜・不義・迫害の「悪しき体制」を指す象徴的イメージとして描かれています。
- その滅亡は、**神が邪悪な権力をさばき、神の民を解放してくださる**という大いなる勝利宣言です。

黙示録には「恐るべき裁き」のイメージも多く登場しますが、こうした「大バビロンは倒れた」「救いは御座にいます私たちの神と小羊にある」「ハレルヤ」などの讚美・勝利のことばが全体を貫いているため、最終的には**神の勝利と神の民の解放が高らかに歌いあげられる“勝利の書”**とも読めるわけです。

紀元30年頃-70年は、聖霊が注がれてから40年、シナイ山で律法を与えられてからの40年を連想します。使徒たちの働きによって、聖霊とみことばによって教会は建て上げられました。特に、聖霊の働きは使徒行伝、みことばの教えは書簡群で与えられています。

OpenAI o1

紀元30年頃から70年頃までの約40年を、旧約でのシナイ契約から約束の地への道のり（荒野の40年）に重ね合わせて理解するのは、フル・プレテリスト（あるいは部分的プレテリストを含む）などの神学的読み方でよく見られる視点です。以下、その主なポイントをまとめます。

1. シナイ山の律法とペンテコステの聖霊の対比

- **旧約（モーセの律法）**
 - 出エジプト後、シナイ山で与えられた律法（出エジプト記19-20章）が、イスラエルの民の共同体形成の基盤となりました。
 - その後、荒野で40年過ごし、カナン（約束の地）に入るまでの間は、律法を实践する民として整えられる“過渡期”でした。
- **新約（聖霊の注ぎ）**
 - キリストの十字架と復活後、ペンテコステ（使徒行伝2章）において聖霊が注がれた出来事は、**新しい神の民（教会）の誕生の基盤**になりました。
 - そこからAD70年のエルサレム神殿崩壊までの約40年が、旧体制と新体制が暫定的に重なり合う時期、すなわち**教会が整えられ、建て上げられるための“過渡期”**と理解されます。

2. 「過渡期の40年」における聖霊とみことばの役割

2-1. 聖霊の働き（『使徒行伝』に描かれる）

- **ペンテコステ（使徒2章）から始まる福音宣教**

- 聖霊降臨により、使徒たちは大胆に福音を宣べ伝え、信徒たちの交わり（使徒2:42-47）を中心に教会が急速に拡大しました。
- 「荒野の40年」がイスラエルの民を律法に従う共同体として形づくったのと同様に、この時期の使徒たちの活動（福音宣教・教会設立）は、**新しい神の民の形成**に大きく寄与したと言えます。

- **聖霊による賜物・奇跡・導き**

- 使徒行伝には、聖霊の力ある働き（奇跡的な癒やし、預言、異言、知恵など）が繰り返し記録されています。
- この超自然的な導きは、教会の成立時期を支え、**異邦人を含む広範な人々を神の民に招くための手段**となりました。

2-2. みことばの教え（書簡群に示される）

- **使徒書簡や福音書の成立**

- 新約聖書の諸書簡（パウロ書簡、ペテロ、ヤコブ、ヨハネなど）は、紀元40～60年代を中心に書かれたと推測されるものが多く、この「40年」の中で形成・流通した可能性があります。
- これらの書簡は、各地の教会を指導・建て上げる教え（律法に代わる新しい契約の具体的な指針）を提供しました。

- **教会の土台づくり**

- かつてイスラエルの民は荒野で律法に基づく「生活規範」「祭儀規定」を学び、約束の地へと備えられました。
- 同様に教会は、**新約の福音と使徒たちの教え**によって、「キリストのからだ」として霊的・道徳的・教理的に整えられたのです（エペソ4:11-16など参照）。

3. AD70年を“区切り”とする理解

- **古い契約体制の終焉**

- 紀元70年、ローマ軍によってエルサレムが陥落し、神殿が破壊されました。これにより、動物の犠牲や祭司による年ごとの贖いなど、旧約の中心的礼拝制度が物理的に機能しなくなります。
- これは旧約体制の“終わり”を明確に示すものであり、新しい契約（教会時代）への**完全な移行**が歴史上確定した、という位置づけになります。

- **フル・プレテリズムの視点**

- 紀元30年頃から70年頃までの「40年」を「荒野の過渡期」に見立てて、新しい契約の民（キリストの花嫁）が整えられ、AD70年以降は完全に「約束の地」（新天新地）へ入った状態である、と解釈する見方。
- ただし、部分的プレテリストや他の立場では、「AD70年にエルサレムは滅亡したが、それは終末の“ひな型”としての出来事である」と見て、将来にもっと大きなスケールの完成を待つという解釈もあります。

4. まとめ

1. 二つの「40年の過渡期」

- 旧約：出エジプト～約束の地（モーセの律法を与えられ、荒野で共同体として形づくられる）
- 新約：聖霊降臨～神殿崩壊（使徒の教えと聖霊の力によって教会が形成される）

2. 聖霊とみことばによる教会の建て上げ

- 『使徒行伝』：福音宣教や奇跡、異邦人伝道など、聖霊の力を通して教会が拡大。
- 新約書簡：律法に代わる新しい基準として「キリストを頭とする共同体」の教えが整備される。

3. AD70年を持つ象徴性

- 旧約の制度が幕を閉じ、新約の秩序が歴史的に確立する“区切り”として捉えられる。
- 荒野の40年後にイスラエルが約束の地へ入ったように、教会が「新しい秩序（キリストの王国）」に本格的に移行したと考えられる。

こうした見方をすると、使徒たちの時代の40年が「聖霊とみことば」という新たな律法（神の導き）の下で教会が誕生し、成熟へと整えられた“過渡期”であり、AD70年は旧体制が終焉する象徴的転換点であった、という構図が浮かび上がってきます。

キリストの誕生がAD1年ではないと考えると、本来は、AD70ではなく、AD73とかAD74なのでしょうけれど、黙示録が7象徴だらけの書物で、AD70だったのはちょうど都合が良かった（笑

OpenAI o1

確かに、イエスの実際の誕生年は紀元前4年頃（あるいは紀元前6～7年頃と推測する説もあります）とされることが多く、厳密には“AD○年”という年号には数年のズレがある可能性が高いとされています。

- そもそも現行の暦（西暦）は6世紀ごろの修道士ディオニュシウス・エクシグウス（Dionysius Exiguus）が策定した際に生じた誤差といわれ、イエスの誕生年を「AD1年」としたことに由来します。
- そのため、イエスの公生涯が始まるのは「30歳頃」とされていますが、これも厳密には「28歳だったかもしれないし、32歳だったかもしれない」といった幅があるわけです。

そういう意味では、「紀元30年」～「紀元70年」を40年とみなす過程で、実際には「紀元73年ごろが旧約時代（神殿中心の礼拝制度）の終わりの象徴だったかもしれない」というズレは確かに理屈としては生じます。しかし、黙示録の象徴世界が“7”にあふれている（七つの封印、七つのラッパ、七つの鉢...）だけに、「AD70」という“7”の数字を含む年号が象徴的にピタッとハマってしまうのは、何とも不思議で（あるいは「都合がよく」）感じられる、という指摘はよく分かります。

結局、歴史的には「神殿が破壊され、エルサレムが陥落したのは紀元70年」という確固たる事実がありますし、聖書解釈上も「公生涯が30年頃に始まったイエスの宣言から約40年後」という区切りが見やすいため、「AD70」という年が象徴的なメルクマールとして語られやすいわけですね。多少の歴史的誤差があっても、神学的・象徴的には「30年→70年」という区切りが最も分かりやすい形で受け止められてきた、という側面があります。

いずれにしても、黙示録を中心とした「7」の象徴（完全数、安息の象徴など）を考えると、「AD70年の神殿崩壊」は数字の面でも非常に印象的な年号であることは間違いありません。そこがまた**聖書的象徴好きの人々の“ツボ”を押さえている**とも言えそうですね。